

千葉県八千代市

市内出土人骨分析委託報告書

堰場台古墳

真木野古墳

2002.3

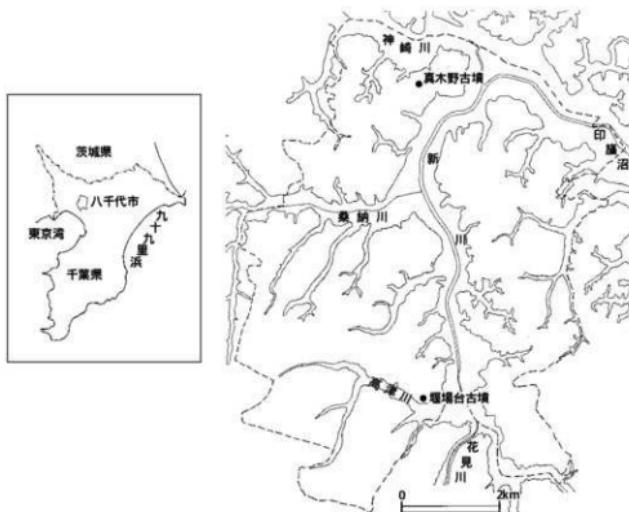
八千代市教育委員会

凡　例

1. 本書は、千葉県八千代市内の遺跡から出土した人骨の分析結果をまとめたものである。
2. 本書に掲載した人骨の分析は、平成12年度の八千代市の文化財保護事業の一環として、橋本裕子氏（総合研究大学院大学文化科学研究科）に委託して実施したものである。
3. 本書に掲載した遺跡の発掘調査の所在地等は、次のとおりである。

遺跡No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
271	せきばだい 壇場台古墳	大和田字壇場台285-13	558. 5.21 ~ 620	7 m ²	上下水道管埋設
20	まきの 真木野古墳	島田台字佐山台972-1 ほか	H2. 9.17 ~ H3.2.14	1,600 m ²	宅地造成

4. 上記各調査の発掘調査報告書は、いずれも未刊行である。本文中に各調査についての概要を記したが、人骨分析以外の部分の詳細については、正式な報告書に掲載する予定である。
5. 本書の執筆は、Iを秋山利光（八千代市立郷土博物館）が、IIを橋本氏・馬場悠男氏（国立科学博物館人類研究部）が、その他を常松成人（八千代市教育委員会 生涯学習課）が行った。
6. 出土した遺物・作成した実測図・写真等は八千代市教育委員会が保管している。



第1図 八千代市と掲載遺跡の位置

本文目次

凡例

I 各遺跡の概要	II 人骨の分析
1 堀場台古墳	1 堀場台古墳出土人骨
2 真木野古墳	2 真木野古墳出土人骨
	III 人骨各部位の名称
1	7
4	22
	26

挿図目次

第1図 八千代市と掲載遺跡の位置	第5図 真木野古墳周辺の旧地形
第2図 堀場台古墳と周辺の遺跡	第6図 全身の骨格と四肢骨、寛骨等
第3図 堀場台古墳周辺の旧地形	第7図 頭蓋と歯
第4図 真木野古墳と周辺の遺跡	5
1	26
2	27
4	26

写真目次

写真1 堀場台古墳	写真5 堀場台古墳出土人骨- 3-
写真2 真木野古墳	写真6 堀場台古墳出土人骨- 4-
写真3 堀場台古墳出土人骨- 1-	写真7 堀場台古墳出土人骨- 5-
17	19
写真4 堀場台古墳出土人骨- 2-	20
18	21

表目次

Table 1 堀場台古墳の頭蓋骨	Table 5 真木野古墳の大腿骨
Table 2 堀場台古墳の大腿骨	Table 6 真木野古墳の脛骨
Table 3 堀場台古墳の脛骨	Table 7 真木野古墳の腓骨
Table 4 真木野古墳の上腕骨	25
16	25
16	25
16	25
25	

I 各遺跡の概要

1 墓場台古墳

(1) 遺跡の立地

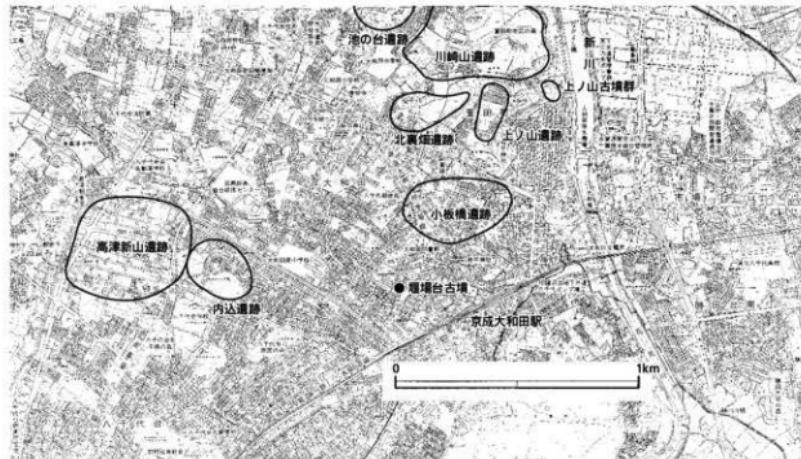
墓場台古墳は八千代市の南部、大和田字墓場台に所在する。市の中央を流れる新川は、かつて途中いくつかの支流を集めて印旗沼に注いでいた。高津川は芦川などの流れとともに、南に突き出た大和田の台地を巻き込みながら、下市場付近で西から新川に合流している。墓場台古墳はその大和田の張り出した台地上に高津川を見下ろすように位置している。台地の先端部には低位の段丘（千葉段丘面）が形成され、そのまま北側の一段高い台地、下総下位面の先端に古墳が築造されていた。

(2) 周辺の遺跡

古墳のある大和田の台地周辺は、江戸時代に賑わった成田街道の大和田宿や大正15年(1926)に開業した京成電鉄大和田駅の周辺の市街化などによる地形の改変のため、遺跡の所在が分かりにくい地域でもある。小板橋遺跡は、この市街化の比較的進んだ地区でも、かろうじて調査の行われた遺跡であった。昭和55年(1980)と昭和59年(1984)に調査が実施され、古墳時代後期の住居跡が検出されており、台地上に集落の展開が想定されている。

平成6年(1994)には、大和田駅周辺の区画整理事業に伴い、埋蔵文化財の所在の有無を調べるために試掘調査が実施されたが、遺構・遺物の検出は見られなかった。また、成田街道の大和田宿周辺でも、試掘調査などが行われているが、近世以前の遺跡の所在は今のところ確認されていない。

高津川をさかのぼる流域には、西方750mの対岸の千葉段丘面上に内込遺跡があり、古墳時代後期と平安時代の集落が所在する（八千代市遺跡調査会2001）。さらに西側に隣接する高津新山遺跡でも、千葉段丘面上には古墳時代前期及び後期の集落が営まれていた。



第2図 墓場台古墳と周辺の遺跡 八千代都市計画基本図 1:10000に加筆

（うえのやま）
堰場台古墳の1km北東にある上ノ山古墳群は、新川に面する痩せ尾根状の舌状台地の先端に円墳が2基所在している。また、この古墳群の西に隣接する台地には、弥生時代後期の集落である上ノ山遺跡があり、さらに谷津を隔てて北側の台地上には川崎山遺跡が位置し、弥生時代後期から古墳時代後期などの集落が見られる。

（3）調査に至る経緯

昭和57年(1982)5月、水道管の埋設工事中に人骨が出てきたとの相談が市教育委員会社会教育課（現生涯学習課）にあった。すぐに現地を確認したところ、古墳の石棺とそれに伴う人骨であると判断された。現場の状況は、工事のため蓋石の一部が割られて開けられ、石棺内の土の上に骨の破片が散らばっていた。大部分は土に埋もれているが相当の量が出土すると見られた。

個人の宅地内の水道管埋設工事を中止することはできず、現状で保存することは困難であり、急速、市教育委員会が直営による調査を実施することとなった。所有者にも早く了解を得ることができたため、同年5月21日から発掘調査が実施され、6月20日に終了した。

（4）調査の結果

個人の宅地裏庭の限られた範囲の調査であったが、かろうじて石棺と掘り方の一部について調査をすることができた。現在でも未整理のため不明な点も多いが、以下概要を記す。残念ながら、主体部の掘り方は全体を十分に検出するには至らなかったため、規模などについては明らかではない。石棺の規模は長さ約2.1m、幅約0.9m、高さ約1.2mであった。蓋石は残っていた2枚と調査前に取り除かれていた



第3図 堰場台古墳周辺の旧地形 明治15年第一軍管地方二万分一迅速測図に加筆

ものが2枚と考えられた。側壁は左右それぞれ4枚ずつ、小口壁は1枚ずつ、底石にも4枚の板石が使われ、合計18枚の板石からなる組み合わせ式の箱式石棺であった。人骨については本書による分析結果に委ねるが、現場では300点以上を実測により取り上げ、また、周辺に散らばったものもできるだけ括として回収している。

副葬されていたものは、直刀が5振と鉄鏃が多数出土している。その他に刀子や耳環、ガラス玉などの出土も見られる。めのう製勾玉は頭蓋骨が検出されたあたりでまとまって出土していた。

参考文献

八千代市遺跡調査会(2001)『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書』

写真1 墳場台古墳



(1) 石棺蓋石検出状況



(2) 人骨出土状況- 1-



(3) 人骨出土状況- 2-



(4) 人骨出土状況- 3-



(5) 人骨出土状況- 4-

2 真木野古墳

(1) 遺跡の立地

真木野古墳は、八千代市の北部、真木野字佐山台に所在する。印旛沼の西端に流れ込む新川と神崎川に挟まれた舌状台地のほぼ中程に位置する。この台地には河岸段丘が形成されており、古墳はその下総下位面に築造され、北側に広がる千葉段丘面やその先に流れる神崎川を見下ろすように立地していた。

(2) 周辺の遺跡

真木野古墳の周辺は、昭和60年(1985)から埋蔵文化財の調査が広範囲にわたって実施された区域の一部である。そのため、周辺の遺跡の状況が比較的良くわかる区域となっている。古墳の西側にほとんど接するように佐山台古墳が所在している。全長33m、前方部の幅約16m、高さ0.9m、後円部径約24m、高さ約1.3mの帆立貝形の前方後円墳であり、現在、公園に取り込まれ現存している。真木野古墳の周辺は佐山台遺跡が広がっている。特に古墳の北側に広がる千葉段丘面には古墳時代前期の集落が展開しており、住居跡165軒あまりが検出されている。また、その西側に隣接する真木野向山遺跡の千葉段丘面には、佐山台遺跡の続きと見られる古墳時代前期の集落が検出されている。谷津を挟んで東側には、古墳時代中期から後期にかけて集落が営まれた東山久保遺跡や、さらに、古墳時代前期の集落を中心とした松原遺跡が調査されている。

真木野古墳の東側の台地には田原窪遺跡がある。台地上には弥生時代中期の環濠集落があり、台地の境目の浅い谷津には古墳時代前期の集落が形成されている。さらに、その千葉段丘面には古墳時代前期及び後期の集落の一部が姿を見せているが、現在は大部分が緑地として現状保存されている。この遺跡内の傾斜面及び先端には3基の古墳が新たに確認され、田原窪古墳群として調査が行われた。このようにこの周辺には密度の高い古墳時代の遺跡群が広範囲に展開している。

真木野古墳のある舌状台地の南側の新川側には、平戸台古墳群の8基の古墳が広く散在している。また、弥生時代後期や古墳時代前期の濃密な集落が台地一面に展開する道跡遺跡がある。この遺跡の西側



第4図 真木野古墳と周辺の遺跡 八千代都市計画基本図1:10000に加筆

には5基の古墳からなる間見穴古墳群や縄文時代早期の地点貝塚などを伴う間見穴遺跡があり、台地の新川側も遺跡密度の高い区域となっている。

(3) 調査に至る経緯

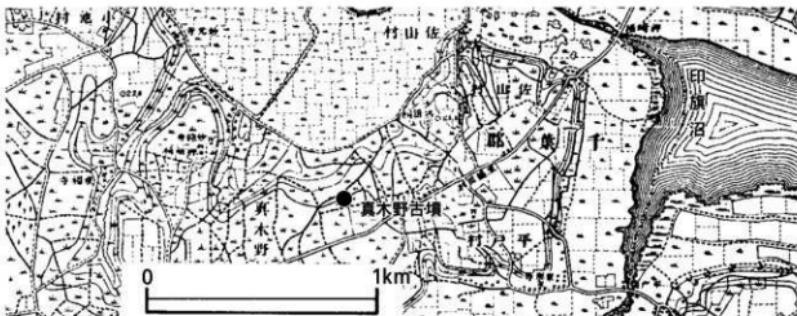
この古墳の発見は古く、八千代市教育委員会が作成した昭和47年(1972)9月時点の遺跡分布表にも円墳として掲載されている。市域北部の真木野から佐山にかけて、大学建設と住宅地造成工事に伴い、昭和60年(1985)5月から埋蔵文化財の発掘調査が実施された。真木野古墳も工事区域に含まれてあり、記録保存の対象となっていた。そのため平成2年(1990)9月17日から翌年2月14日まで発掘調査が実施された。

(4) 調査の結果

古墳は調査時点で墳丘部が残り、保存状況の良好な古墳であった。古墳の規模は直径約40m、高さ2m弱であり、円墳であると判断されている。事前にボーリングステッキで石棺等の所在を確認したところ、墳丘の南側の裾にあることがわかった。また、墳丘はローム土などをつき固めて構築されていた。

調査の結果は未整理のため詳細については不明な点も多いが、調査時の所見として以下のことがわかっている。墳丘の周囲にはなだらかで浅い周溝がめぐっていた。周溝の幅は2.5m~3m程度で、周溝の外周の直径は南西-北東方向で40m程度、北西-南東方向で32m程度のやや梢円形を呈するようである。石棺を埋設した主体部は当初確認のとおり、墳丘の南側の裾に検出された。

主体部は長輪をほぼ東西方向に向けて設けられていた。石棺は16枚ほどの板石を組み合わせた箱式石



第5図 真木野古墳周辺の旧地形 明治15年第一軍管地方二万分一迅速測図に加筆
棺であり、石棺の蓋石は閉じられた状態で検出されている。

出土遺物は十分な整理、分析がなされていないため、本報告がなされた場合と相違ができるものと思われるが、ここでは若干の概要を記す。人骨については今回の分析結果のとおりであるが、残存状況は悪く、個体識別は困難な状況であった。現場では250点程の点数を実測して取り上げている。副葬品として出土したものは、直刀が3振程度で、その他鉄器片が出土しているが、鉄鎌は出土していない。また切子玉も石棺内に副葬されていた。

参考文献

八千代市教育委員会(1995)『平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報』

写真2 真木野古墳



(1) 調査前風景(東から)



(2) 墓丘調査状況



(3) 石棺蓋石検出状況



(4) 人骨出土状況- 1-



(5) 人骨出土状況- 2-



(6) 人骨出土状況- 3-



(7) 人骨出土状況- 4-



(8) 人骨出土状況- 5-

II 人骨の分析

橋本裕子（総合研究大学院大学文化科学研究科）
馬場悠男（国立科学博物館人類研究部）

1 堀場台古墳出土人骨

(1) 緒言

堀場台古墳は、千葉県八千代市大和田字堀場台285-13に所在する。昭和58年5月～同年6月にかけて調査された。人骨が検出されたのは、18枚程度の板石からなる箱式石棺からである。石棺の大きさは長辺約2.1m×短辺約0.9m×深さ約1.2m、年代は6世紀後半～7世紀代のものと推定される。人骨は、石棺内のほぼ全面から出土している。箱式石棺内出土人骨の四肢骨および体幹骨は、相互の解剖学的位置関係を保っておらず、人骨相互の解剖学的位置関係は乱れている。したがって、個体別に記載する事が困難であるため、人骨の部位ごとにそれぞれ記載した。

人骨名については和名を用いた。歯の種別については歯式を用いた。○印は歯槽開放、×印は生前に歯槽閉鎖、=印は歯槽破損をそれぞれ表している。計測はすべてマルチン法に従った。なお、本文中の計測値の単位はmmである。また、№付き数字は取り上げ番号である。

(2) 人骨所見

① 頭蓋

観察できた頭蓋は9点出土している。

頭蓋1（NO.269）保存状態は全体的に良好であるが、左頭頂骨と頭蓋底が破損している。頭蓋の上面觀は卵型である。冠状縫合と矢状縫合が保存されている。癒合状態は、内板では、完全に閉鎖し、外板では一部に癒合が始まっている。側頭線は骨表面が剥離破損しているので不明。乳突上稜が発達している。外耳孔は円形を呈す。眉間が高い。前頭結節は殆ど発達していない。眼窩口は隅丸正方形を呈している。その長軸はさほど傾斜していない。前頭骨頸骨突起は比較的頑丈である。梨状口はやや狭く（鼻幅22.5、鼻高46.0）洋梨型である。下縁は鈍である。頸骨の横への張り出しは比較的小さい。歯の保存状態を以下の歯式に示した。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

咬耗はやや進んでおり、プロカの1～2度に相当する。また、上顎の第1大臼歯は、近心舌側方向に傾斜した異常な磨耗である。咬合は、上顎は突頸であるが鉗子状咬合である。下顎枝は厚く頑丈で、幅はやや広めで、高さは低い。下顎体はやや高めである。オトガイ隆起はなく、ほぼ垂直に立ち上がっている。本個体の下顎骨は「ゆりいす状」下顎骨である可能性が高い。以上のことから本頭蓋の性別は、男性の可能性が高い。年齢は縫合の状態から壮年期である。

頭蓋2（NO.270）頭頂骨の左と頭蓋底、左右の側頭骨の一部が保存されている。矢状縫合の一部とラムダ縫合が確認できる。癒合状態は、内板では完全に閉鎖している。中硬膜静脈の圧痕が明瞭である。外板では一部に癒合が始まっている。側頭線および乳突上稜は骨表面が剥離破損しているので不明。乳様突起は非常に大きく頑丈である。外耳孔は円形で、さほど大きくなない。丸みを帯びた五角形である。歯の保存状態を以下の歯式に示した。

8 7 6 5 4 3 0 0 | 1 2 3 4 5 6 7 8

咬耗は殆どなく、プロカの0~1度に相当する。保存されている歯にカリエスは無い。左右上頸切歯はシャベルが明瞭である。上顎右第1大臼歯には第5咬頭がある。以上のことから、本頭蓋の性別を男性と判断した。年齢は壮年である。

頭蓋3（NO.275）前頭骨と頭蓋底の一部が保存されている。骨質は厚く頑丈である。眉間が隆起しており、眉弓は強く隆起している。眼窓上縁はやや丸みを帯びている。頬骨弓は細い。両後頭頸の最大幅は約48mmであり、男性と女性の中間である。本頭蓋は頸骨部が破損しているが、上顎右第1大臼歯と、左第2大臼歯が保存されている。以上のことから、本頭蓋の性別を判断することはできなかった。

頭蓋4（NO.299）保存状態は良好であるが、後頭骨、頭蓋底、下頸骨を破損している。骨質は厚く頑丈である。頭蓋の上面觀は卵型である。冠状縫合と矢状縫合が確認できる。癒合状態は、外板では矢状縫合の一部に癒合消失が始まっている。内板では、冠状縫合および矢状縫合が完全に消失している。乳突上稜は骨表面が剥離破損しているので不明。外耳孔は円形で大きい。眉弓の隆起はやや高い。前頭結節は殆ど発達していない。眼窓口は隅丸長方形を呈している。その長軸は僅かに傾斜している。前頭骨頬骨突起は比較的頑丈である。梨状口はやや狭く（鼻幅25.3、鼻高50.5）洋梨型である。下縁は鈍である。頬骨の横への張り出しが比較的大きい。頬骨弓は太い。以上のことから本個体を男性と判断した。年齢は縫合の状態から壮年期である。歯の保存状態を以下の歯式に示した。

==== 0 0 0 0 0 | 0 0 0 0 0 0 0 0

頭蓋5（NO.302）保存状態は悪い。左右頭頂骨の一部と頭蓋底、側頭骨、前頭骨、鼻骨、左頬骨を破損している。また、保存されている頭蓋は、接合部が少なかった。骨質は厚く頑丈である。矢状縫合の一部とラムダ縫合が確認できる。癒合状態は、内板では完全に閉鎖している。外板では一部に癒合が始まっている。側頭線および乳突上稜は骨表面が剥離破損しているので不明。乳様突起は太い。外耳孔は梢円形で、さほど大きくなない。眉間の隆起や眉弓の隆起は、前頭骨が破損しているので不明である。眼窓はやや丸みを帯びている。頬骨は小さく、頬骨弓は細い。犬歯窩が大きく窪んでいる。両後頭頸の最大幅は約56mmと広い。本頭蓋は頸骨部が破損しているが、上顎右第1大臼歯と、左第2大臼歯が保存されている。歯の保存状態を以下の歯式に示した。

○ ○ 6 5 4 0 0 0 | 0 0 0 4 5 0 ==

咬耗はやや進んでおり、プロカの2度に相当する。保存されている歯にカリエスは無い。以上のことから、本頭蓋の性別を男性と判断した。年齢は壮年である。

頭蓋6（NO.302）右側頭骨の一部のみ保存されている。頭蓋5（NO.302）と同番号で保管されているが、別個体である。外耳孔は小さい。頬骨弓は細く華奢である。以上のことから、本頭蓋の性別を女性と判断した。年齢は壮年である。

頭蓋7（NO.303）後頭骨の一部と、左右側頭骨の一部、顔面部の左が保存されている。骨質は厚く頑丈である。冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合のそれぞれは、断片的に確認できるが、縫合の走行は確認できない。癒合状態は、内板の癒合状態は確認できないが、外板の癒合は閉鎖している。乳突上稜は発達している。乳様突起は太い。外耳孔は円形で小さい。眉間は高く眉弓が隆起している。眼窓は丸みを帯びた正方形である。頬骨は破損していて不明。犬歯窩の窪みはない。歯の保存状態を以下の歯式に示した。

○ 7 6 0 0 0 0 | 0 0 0 4 5 6 7 0

咬耗は殆どなく、プロカの1度に相当する。保存されている歯にカリエスは無い。右第1小臼歯と左第2小臼歯は2根である。以上のことから、本頭蓋の性別を男性と判断した。年齢は壮年前期である。

頭蓋8（NO.不明） 後頭骨，左右の頭頂骨と側頭骨の一部が保存されている。骨質は厚く頑丈である。矢状縫合，ラムダ縫合が確認できる。癒合の状態は，内板では癒合は閉鎖途中で，外板の癒合は開離している。乳突上稜は発達している。乳様突起は太い。外耳孔は橢円形で，やや大きい。頸骨弓は，太く頑丈である。以上のことから，本頭蓋の性別を男性と判断した。

頭蓋9（NO.301脇にあった不明） 後頭骨，左右の頭頂骨と側頭骨の一部が保存されている。矢状縫合，ラムダ縫合が確認できる。癒合の状態は，内板では完全に閉鎖している。外板では矢状縫合は閉鎖しており，ラムダ縫合は一部で癒合が始まっている。頭蓋の内板では，中硬膜静脈の圧痕が明瞭である。頭頂結節はない。側面觀では，乳様突起が左右とも太く，垂直に長く下垂する。乳突上稜の発達は殆どない。外耳孔は大きな円形である。乳突上稜は観察できない。以上のことから，本頭蓋の性別を判断することはできなかった。年齢は壮年後期である。

② 下顎骨

所属個体が不明な下顎骨が8点保存されている。本古墳出土の下顎骨は，全て切歯の咬面のみが咬耗しているため，鉗子状咬合である可能性が指摘できる。しかし，年齢が若い段階では，鉄状咬合の個体でも下顎切歯の咬面のみが咬耗するため，最終的な判断は出来ない。歯槽骨がなく上顎歯のみが含まれているものは，上下顎とも以下にまとめて歯式の記載をした。

下顎骨NO.32 下顎体の保存状態は良いが，左右とも下顎枝が破損している。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

= = 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 = =

歯の咬耗は，エナメル質が磨り減っており，プロカの2~3度である。左第2小白歯近心にカリエスがある。オトガイ隆起は発達している。右のオトガイ孔が2つある。下顎枝は破損しているが，本下顎骨は「ゆりいす状」下顎骨である可能性が高い。

下顎骨NO.150 正中部分が残っている。歯槽部は正中から左が残っている。歯の保存状態は以下の歯式のとおりである。保存されている歯はない。

— = = —

下顎骨NO.255 全体的に保存されているが，右下顎頭と，左下顎枝が破損している。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 0

歯の咬耗は，エナメル質がほとんど磨り減っておらず，プロカの1度である。第2大臼歯頬側にカリエスがある。第1大臼歯は，左右とも第6咬頭がある。下顎枝の幅は狭く，高さは低い。オトガイ隆起は僅かである。

下顎骨NO.211正中から左と右の切歯部の歯槽骨が残っている。下顎体は低く，オトガイ隆起は殆どない。下顎枝の幅は狭く，後方に傾いている。歯の保存状態は以下の歯式のとおりである。

○ ○ | ○ / / / ○ ○ ○

左の側切歯，犬歯，小白歯は歯根のみが保存されて，観察は不可能である。また，左大臼歯は，3本とも歯槽が閉鎖途中である。

下顎骨NO.296 全体的に保存されているが、右下顎頭と、左下顎枝の上半分を欠損している。また、上顎歯が保存されている。下顎枝は大きく、頑丈である。オトガイ結節とオトガイ隆起は発達していない。右の下顎角は破損しているが、下顎角幅は広い。以上のことから、本個体の性別を男性と判断した。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

=	=	=	4	=	2	1		1	2	3	4	5	6	7	=
8	×	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	×

歯の咬耗は、プロカの1度。保存されている歯にカリエスはない。歯並びは悪い。比較的若い年齢と思われる。

下顎骨NO.298全体的に保存されているが、左下顎枝の上半分を欠損している。下顎枝はさほど大きくなないが、頑丈である。オトガイ結節とオトガイ隆起が頗著で、明瞭なオトガイ三角が形成されている。下顎角は大きく外反している。また、本下顎骨は「ゆりいす状」下顎骨である。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	○	7	8
---	---	---	---	---	---	---	---	--	---	---	---	---	---	---	---	---

歯の咬耗は、プロカの1ないし2度。歯並びは悪い。比較的若い年齢と思われる。以上のことから、本個体の性別を男性と判断した。

下顎骨NO.301正中から右が保存されている。歯の保存状態は以下の歯式のとおりである。

8	7	6	=	=	=	=	=	
---	---	---	---	---	---	---	---	--

咬耗は1度程度である。第3大臼歯は萌出途中であることから、本個体の年齢を18~20歳前後と判断した。性別は不明である。また、同一番号(NO.301)の頭蓋骨とは別個体である。

下顎骨NO.310下顎体は保存されているが、下顎枝は、左右とも破損している。オトガイ隆起が頗著で、明瞭なオトガイ三角が形成されている。下顎体は、さほど高くない。歯の保存状態は以下の歯式のとおりである。

=	7	=	4	=	=	=		=	3	=	=	=	=	=	=
○	7	6	5	4	3	2	○		○	○	○	4	5	6	7

咬耗は、やや進んでおりプロカの1~2度である。左右下顎第1大臼歯には第7咬頭がある。

③ 体幹骨

椎骨は、NO.247~252(腰椎)が同一個体のものであるという同定ができたが、その他は、破片資料が多く、同一個体の同定ができなかった。NO.247の第1仙椎とNO.248の第5腰椎は、先天的に癒合している。

④ 上腕骨

右が7点(NO.37, 45, 64, 82, 230, 271, 309), 左が8点(NO.46, 47, 62, 128, 130, 151, 170, 221), 左右不明1点(NO.288), 保存されている。左右が同一個体として対になることが確認できたものはない。保存状態の良好な8点(右: NO.37, 45, 82, 左: 46, 47, 62, 128, 151)を報告する。

NO.37は、近位および遠位の骨端を破損している。骨表面は風化による痛みがひどい。骨体は細く革奢で短い。

NO.45は、近位1/2を破損している。三角筋粗面は僅かに発達している。三角筋付着面は下方だけ保

存されており、やや広い。

NO.82は、近位骨端の一部を破損している。骨体は細く華奢である。三角筋付着面は狭く、隆起は殆どない。

NO.46は、近位骨端と遠位骨端のそれぞれ一部を破損している。三角筋付着面は狭く、隆起は殆どない。筋粗面は発達が殆どなく、垂直な平面を呈している。

NO.47は、近位2/3が破損している。骨質は厚く頑丈である。骨体は外側に僅かに湾曲している。近位骨端は左右に大きく張り出している。

NO.62は、近位1/4と遠位骨端を破損している。骨体は細く華奢である。筋粗面は発達が殆どなく、垂直な平面を呈している。

NO.128は、近位および遠位の骨端を破損している。骨表面は風化による痛みがひどい。骨体は細く華奢である。筋粗面は発達が殆どなく、垂直な平面を呈している。

NO.151は、近位骨端の一部と遠位1/4を破損している。骨質は厚く頑丈である。三角筋付着面は広く、隆起が明瞭である。太さ（中央最大径：24.0、中央最小径：19.5）は古墳時代男性平均と大差ない。本上腕骨の性別は、男性と思われる。

④ 寛骨

保存状態は全体的に悪かった。そこで、保存状態の良好である寛骨片を記載した。対になる左右寛骨が1点（NO.164）と右が5点、左が6点（右：NO. 50, 70, 81, 82? その1, 176 左：NO.36, 82? その2, 86, 143, 145, 220）保存される。尚、左右にNO.82?の番号があるが、同一個体ではない。

NO.164は、左右とも腸骨と坐骨のそれぞれ一部が保存されている。大坐骨切痕は狭い。以上のことから本寛骨の性別を男性と判断した。

NO.50は、大坐骨切痕周辺部が僅かに保存されている。大坐骨切痕は大きく開いている。以上のことから本寛骨の性別を女性と判断した。また、保存されている耳状面は、凹凸が明瞭になっており、本寛骨の年齢は壮年に達していたんだろうと思われる。

NO.70は、腸骨の一部が保存されているのみである。腸骨稜の癒合は終了している。大坐骨切痕は広い。以上のことから、本寛骨の性別を女性と判断した。年齢は壮年と判断した。

NO.81は、腸骨と坐骨のそれぞれ一部が残っている。腸骨稜の癒合は終了しており、耳状面の凹凸は明瞭ではない。大坐骨切痕は広く、妊娠出産痕がある。以上のことから、本寛骨の性別を女性と判断した。年齢は壮年と判断した。

NO.82?その1は、腸骨の一部、坐骨、恥骨の一部が保存されている。耳状面の凹凸は大きく明瞭で、辺縁には棘が形成される。大坐骨切痕は広く、妊娠出産痕がある。以上のことから、本寛骨の性別を女性と判断した。年齢は壮年である。

NO.176は、腸骨、坐骨、恥骨のそれぞれ一部が保存されている。大坐骨切痕の湾入は鋭角である。寛骨臼は大きい。以上のことから、本寛骨の性別を男性と判断した。年齢は壮年である。

NO.36は、腸骨の一部と、坐骨の一部が保存されている。耳状面は凹凸が明瞭で、辺縁には棘が形成される。大坐骨切痕は広く、妊娠出産痕がある。以上のことから、本寛骨の性別を女性と判断した。性別は壮年である。

NO.82?その2は、腸骨と坐骨のそれぞれ一部が保存されている。腸骨稜は、癒合が終了していない。耳状面の凹凸は殆どなく、辺縁部の棘は形成されていない。腸骨と坐骨の癒合が終了していない。以上のことから、本寛骨の年齢は15~18歳程度の未成年であると判断した。性別は不明である。

NO.86は、腸骨、坐骨、恥骨のそれぞれ一部が保存されている。耳状面の凹凸は殆どなく、辺縁部の棘は形成されていない。腸骨と坐骨の癒合が終了していない。以上のことから、本寛骨の年齢は15~18歳程度の未成年であると判断した。性別は不明である。

NO.143は、腸骨と坐骨のそれぞれ一部が保存されている。腸骨と坐骨のそれぞれ一部が保存されている。耳状面の辺縁には棘が形成される。大坐骨切痕は広い。以上のことから本寛骨の性別を女性と判断した。年齢は壮年である。

NO.145は、坐骨と恥骨の一部が保存されている。大坐骨切痕の湾入が鋭角である。寛骨臼は大きい。以上のことから、本寛骨の性別を男性と判断した。年齢は壮年である。

NO.220は、坐骨と、恥骨の一部がそれぞれ破損しているが、保存状態は良好である。ただし、腸骨の骨表面は風化により痛んでいる。耳状面の凹凸は明瞭で、辺縁には棘が形成される。大坐骨切痕は広く妊娠出産痕が明瞭に確認できる。以上のことから、本寛骨の性別を女性と判断した。年齢は壮年である。

⑤ 大腿骨

右が9個体分12点（NO.8, 10, 16, 31, 35, 39, 48, 57, 85, 144, 154, 161）、左は11個体分15点（NO.7, 9, 12, 14, 15, 21, 42, 63, 78, 84, 104, 105, 110, 162, 163）が保存されている。殆どの大腿骨は、近位端、もしくは遠位端を破損している。左右の個体識別が可能な個体を最初に報告し、次に保存が良好で推定身長の算出できたNO.84、最後に推定身長の算出できない個体群を右、左に分けて報告する。対になる左右の個体識別が出来たのは、4点（NO.8, 9）（NO.35, 63）（NO.78, 85）（NO.161, 162）である。

NO.8, 9は、左右とも近位1/3を破損している。骨質は、厚く頑丈である。ピラスタルの形成は殆どない。骨体の上部は前後につぶれ、扁平である。骨体の前方湾曲は殆どない。遠位端は僅かに張り出している。以上のことから、本大腿骨の性別を女性と判断した。

NO.35, 63は、右は近位1/3、左は近位端を破損している。骨体は華奢（骨体中央前後径22.0）だが、ピラスタル形成が僅かにある。骨体の上部はつぶれ、扁平である。骨体は前方湾曲をしている。以上のことから、本大腿骨の性別を女性と判断した。

NO.78, 85は、左右とも近位、遠位端の一部を破損している。遠位端は未癒合である。ピラスタルの形成は殆どない。骨体の上部は前後にややつぶれており、僅かだが扁平で、骨体の前方湾曲は殆どない。以上のことから本大腿骨を17~18歳前後の未成人と判断した。性別は不明である。

NO.161, 162は、左右とも大転子部と、遠位端の一部を破損している。全体的に華奢ではあるが、最大長が非常に長い（右：441.0 左：435.0）。ピラスタル形成は僅かではあるが発達している。骨体の上部は前後にややつぶれており、僅かだが扁平である。骨体前方湾曲が僅かにある。骨体遠位1/3ほどが遠位端までなだらかな広がりを見せるという特徴がある。以上から、本個体の性別を男性と推定した。藤井の式により大腿骨から算出した推定身長は163.8cmである。

NO.57（NO.39と接合）は右である。骨体近位の後面を一部破損している。大腿骨頸部は細い。ピラスタル形成が僅かにある。骨体の上部は前後につぶれており、扁平である。骨体は前方湾曲が僅かにある。以上から、本大腿骨の性別を女性と判断した藤井の式により大腿骨から算出した推定身長は142.5cmである。

NO.84は左である。近位後面の一部と、遠位端の一部を破損している。骨質は厚く頑丈である。ピラスタル形成は、殆どない。骨体の上部は前後につぶれており、扁平である。骨体の前方湾曲は殆どない。

以上のことから、本大腿骨の性別を男性と判断した。藤井の式により大腿骨から算出した推定身長は159.3cmである。

NO.31は右である。近位1/3を破損している。骨質は厚く頑丈である。ピラスタル形成は、発達しているが、縄文時代人骨のような付柱状ではなく、断面が滴型を呈している。前方湾曲はしていない。骨体中央部の前後径は太い。大腿骨遠位端に骨端線が残っている。以上のことから、本大腿骨の性別を男性と判断した。

NO.48は右である。近位端を破損している。骨体は太く頑丈で（前後径29.5：横径28.2）、ピラスタル形成は強い。骨体上部はつぶれ、扁平である。骨体は前方湾曲をしている。以上のことから、本大腿骨の性別を男性と判断した。

NO.144は右である。近位および遠位骨端を破損している。骨質は厚く頑丈である。ピラスタル形成はない。骨体上面はつぶれ、扁平である。骨体は僅かであるが前方湾曲している。以上のことから、本大腿骨の性別を男性と判断した。

NO.10 (α 16 or 100) は右である。近位骨端を破損している。骨体は細く華奢だが、ピラスタル形成が僅かにある。大腿骨遠位端は未癒合の状態である。骨体が細く華奢で、骨体上面のつぶれがないのは、本大腿骨が15歳前後の年齢であり、成長の途中であるからであろう。本大腿骨の性別を判断することはできなかった。

NO.12 ? は左である。近位および遠位骨端を破損している。骨質は厚くはないが、ピラスタル形成が僅かにある。骨体上部はつぶれ、扁平である。骨体は前方湾曲をしている。計測値や観察から本大腿骨の性別を判断することはできなかった。

NO.14は左である。遠位端を破損している。大腿骨頭部は細い。骨体は細く華奢（骨体中央前後径22.0）であるが、ピラスタル形成がある。骨体上部はつぶれており、扁平である。骨体は前方湾曲をしている。以上のことから、本大腿骨の性別を女性と判断した。

NO.104は左である。遠位半分を破損している。大腿骨頭部は細い。骨体は細く華奢で、ピラスタル形成はない。骨体上部は僅かにつぶれ、扁平である。以上のことから、本大腿骨の性別は女性である可能性が高い。

NO.105は左である。近位および遠位を破損している。骨体は細い（骨体中央横径24.0）が、ピラスタル形成が僅かに発達している。骨体上部はつぶれ、扁平である。骨体は大きく前方湾曲している。骨体中央周は、80.3と小さい。以上のことから、本大腿骨の性別は女性である可能性が高い。

NO.163は左である。大転子、近位端の一部を破損している。骨体は、やや細い。ピラスタル形成は、殆どない。骨体上部はつぶれ、扁平である。前方湾曲はしていない。骨体中央周は82.5と小さい。以上のことから、本大腿骨の性別は、女性である可能性が高い。

NO.42は左である。遠位1/4を破損している。骨体は細く華奢である。本大腿骨の大転子頭は未癒合の状態である。骨体が細く華奢で、骨体上面のつぶれが僅かであるのは、本大腿骨が15歳前後の年齢であり、成長の途中であるからであろう。本大腿骨の性別を判断することはできなかった。NO.10 (α 16 or 100) の左の可能性が考えられるが、断定はできない。

② 腰骨

右8点 (NO.12, 96, 112, 121, 131, 139, 142, 132 ?), 左11点 (NO.11, 22, 30, 60, 61, 66, 101, 111, 141, 155, 158), 左右不明3点 (NO.13, 137, 138), 合計22点残っている。殆どの腰骨は、近位端、もしくは遠位端を破損するもの、骨体片が多かった。左右の識別ができる、保存状態の良好な

資料を中心に報告した。

NO.12は、近位1/4程度が残っている。後面のヒラメ筋線は不明瞭である。男性のものと思われる。

NO.96は、近位1/3を破損している。骨端遠位は未癒合の状態であり、本脛骨が15～18歳程度の未成人脛骨であると判断した。性別は不明である。

NO.112は、近位および遠位骨端を破損している。骨体は土圧による圧迫で破損しており、計測することはできなかった。

NO.131は、近位および遠位の骨端を破損している。骨表面の風化による痛みが強い。計測値や観察から本脛骨の性別を判断することはできなかった。

NO.132？は、近位骨端および遠位骨端の一部を破損している。骨全体は細く華奢で、後面のヒラメ筋線は不明瞭である。以上のことから、本脛骨の性別を女性と判断した。

NO.139は、遠位端の一部を破損している。骨体は細いが非常に長い。後面のヒラメ筋線は僅かに確認できるが明瞭ではない。以上のことから、本脛骨の性別を男性と判断した。

NO.142は、近位1/3と遠位骨端の一部を破損している。骨体は太く頑丈で、断面は僅かではあるが菱形に近く、扁平である。以上のことから、本脛骨の性別を男性と判断した。

NO.11は、近位骨端の一部と、遠位1/3を破損している。骨体は太く頑丈で、後面のヒラメ筋線は明瞭である。骨体は僅かに扁平である。以上のことから、本脛骨の性別を男性と判断した。

NO.13は、骨体の1/3程が残っているだけである。骨体は太く頑丈で、以上のことから、本脛骨の性別を男性と判断した。

NO.22は、近位骨端と、遠位1/3を破損している。骨体は細く華奢である。後面のヒラメ筋線は不明瞭である。以上のことから、本脛骨の性別を女性と判断した。

NO.30は、近位1/3と遠位骨体の一部を破損している。骨体は細く華奢である。以上のことから、本脛骨の性別を女性と判断した。

NO.60は、近位骨端の一部と、遠位1/3を破損している。骨体は細く、後面のヒラメ筋線は不明瞭である。近位骨端は未癒合の状態であり、本脛骨の年齢を15～18歳程度の未成年と判断した。性別は不明である。

NO.111は、近位および遠位骨端の一部を破損している。骨体頑丈だが、後面のヒラメ筋線は不明瞭である。骨体は、僅かに扁平である。骨間縁は、明瞭である。以上のことから、本脛骨の性別を男性と判断した。

NO.141は、近位骨端の一部と、遠位1/2を破損している。骨質は厚く頑丈で、後面のヒラメ筋線は非常に明瞭である。近位骨体は大きく左右に張り出している。骨体の断面は菱形で、僅かに扁平である。以上のことから、本脛骨の性別を男性と判断した。

NO.155は、近位骨端の一部と、遠位端を破損している。骨体は細いが近位端は左右に張り出している。後面のヒラメ筋線は不明瞭である。骨体は、僅かに扁平である。以上のことから、本脛骨の性別を男性と判断した。

⑥ 腕骨

骨体部分が9点（NO.17, 18, 25, 33, 34, 117, 136, 156, 157）残っている。いずれも骨端や断面の一部を破損しており、最大長などの計測は不可能であった。骨折や病変などは認められず、特に記載することはない。

⑤ 手・足根骨、手・足指骨

それぞれ断片的に保存されているが、骨折や病変などは認められず、特に記載することはない。

(3)まとめ

本石棺出土の個体の同定は非常に困難であった。本石棺から出土した人骨の総数は、保存されていた個体数の最も多い大腿骨から判断した。大腿骨左は11個体分あり、未成人と判断できる個体が3個体(大腿骨遠位端が未癒合である個体が少なくとも2、また大腿骨遠位端に骨端線の残っている個体1)ある。従って、本石棺内の人骨総数を少なくとも成人8個体、青年3個体の合計11個体と判断した。次に、本石棺出土人骨の性別は、頭蓋の保存されている頭蓋骨は、男性に偏っているが、女性の寛骨右が4個体、女性の左大腿骨が6個体(推定したものを含む)確認できたことから、本石棺内には少なくとも6個体の女性が埋葬されていたと推定できる。性別の特定できなかった個体があるが、本石棺内の被葬者に性別による偏りがあるとは考えにくい。

そして、本石棺出土人骨の年齢は、成人のほとんどが壮年期に属しているようである。15歳以上に達したもののが古墳時代の平均死亡年齢(男性30.6歳、女性34.5歳)と大差はない。

埋場台古墳出土人骨の形態的特徴は、下頸骨が「ゆりいす状」である個体群と、そうでない個体群の2つに分かれるようである。さらに、四肢骨においては、大腿骨最大長が現代人より長く、骨体の断面では摘まんだような付柱の形成ではなく、中央断面示数が縄文・現代人よりもはるかに小さい。これらの特徴は、東日本古墳人の特徴(山口、1985)と同じである。ただし、個々の大腿骨の形態的特徴は、東日本古墳人の特徴の範囲内で、多岐に富んでいる。ピラスターの隆起の状態や、骨体の断面形態、骨体の前方への湾曲などは、まとまりがない。

最後に、古墳から出土する複数の被葬者間の親族関係については、九州あるいは近畿地方を中心に歯冠計測値から推定する方法が行われ成果をあげている。しかし、本古墳出土人骨の歯は、遊離歯や咬耗が進み計測不可能な個体が多くいた。また、被葬者の埋葬過程が不明であるため、歯冠計測値から親族関係を推測することはできない状態だった。

謝辞

本報告を書くにあたり、頭蓋の鑑定には国立科学博物館人類研究部の溝口優司先生に御指導いただきました。末筆ながら感謝いたします。

参考文献

- 城一郎 1938「古墳時代日本人の人類学的研究」『人類学雑誌』1
平本嘉助 1972「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化」『人類学雑誌』80-3 pp. 221-236
藤井明 1960「四肢長骨の長さと身長との関係について」『順天堂大学体育学部紀要』3 pp. 49-60
山口敏 1985「国家成立前後の日本人V 東日本-とくに関東・東北南部地方」『季刊 人類学』16-3
Bin YAMAGUCHI 1987 Metric Study of the Crania from Protohistoric Sites in Eastern Japan.
Bulletin of the National Science Museum Tokyo 13
TODD, T. W. 1920 changes in the pubic bone. I. The male white pubis. *American Journal of Physical Anthropology* 3 pp. 285-334

Table 1. Measurements of the crania (mm)

Sample No.	269	299	302	303	32	255	296	298
Sex	M	M	M	M		M	M	
1 Maximum cranial length	181.0							
5 Basion-nasion length								
8 Maximum cranial breadth		139.0						
9 Minimum frontal breadth	86.5	100.3						
45 Bimaxillary breadth								
46 Bimaxillary breadth	94.9							
48 Upper facial breadth	55.0	65.2						
51 Orbital breadth	37.2	39.1		35.0				
52 Orbital height	32.8	34.0		33.2				
54 Nasal breadth	22.5	25.3	24.2					
55 Nasal height	46.0	50.5		46.0				
57 Minimum breadth of nasalia	7.6	7.9		6.0				
80 Dental arch length of maxilla	60.0		53.2					
66 Bigonial breadth						102.0	107.5	
69 Height of mandibular symphysis	33.2				36.0	32.0	36.2	34.0
70 Height of ascending ramus	62.5							

Table 2. Measurements of the femora (mm)

Sample No.	161	162	8	9	85	78	31	35	48
Sex	M	M	M	M		M	M	M	
Side	R	L	R	L	R	L	R	R	R
1 Maximum length	441.0	435.0							
6 Sagittal mid-shaft diameter	27.9	25.0	24.0	24.2	24.0	24.0	27.2	22.5	29.5
7 Transverse mid-shaft diameter	25.5	26.8	25.0	25.6	24.8	24.7	25.0	25.5	28.2
8 Circumference of the mid-shaft	86.0	83.0	79.0	81.0	79.0	78.2	83.2	78.9	91.5
18 Medio-head diameter									
19 Transverse diameter of the head									

Sample No.	57	144	127	14	63	84	104	105	163
Sex	F	M	F	F	M	M	M	M	F
Side	R	R	L	L	L	L	L	L	L
1 Maximum length	364.0					423.0			
6 Sagittal mid-shaft diameter	23.0	28.5	23.5	22.0	22.0	27.8	26.5	24.6	23.0
7 Transverse mid-shaft diameter	24.2	28.0	26.8	26.0	23.8	28.5	23.5	24.0	27.5
8 Circumference of the mid-shaft	79.1	91.1	70.0	77.8	72.0	90.5	81.5	80.3	82.5
18 Medio-head diameter						46.3			
19 Transverse diameter of the head									

Table 3. Measurements of the tibiae (mm)

Sample No.	131	132	142	11	61	111	139	141	155
Sex	F	M	M	M	M	M	M	M	M
Side	R	R	R	L	L	L	R	L	L
1a Spino-malleolar length						365.2			
8 Maximum mid-shaft diameter	27.1	25.0	31.0	24.5	26.6	28.2	27.8	31.8	30.5
9 Transverse mid-shaft diameter	22.5	19.1	19.8	19.0	18.8	23.2	19.0	22.0	18.8

写真 3



1 . No.269号人骨 (正面)



2 . No.303号人骨 (正面)



3 . No.299号人骨 (正面)



4 . No.299号人骨 (侧面)

— 5cm —

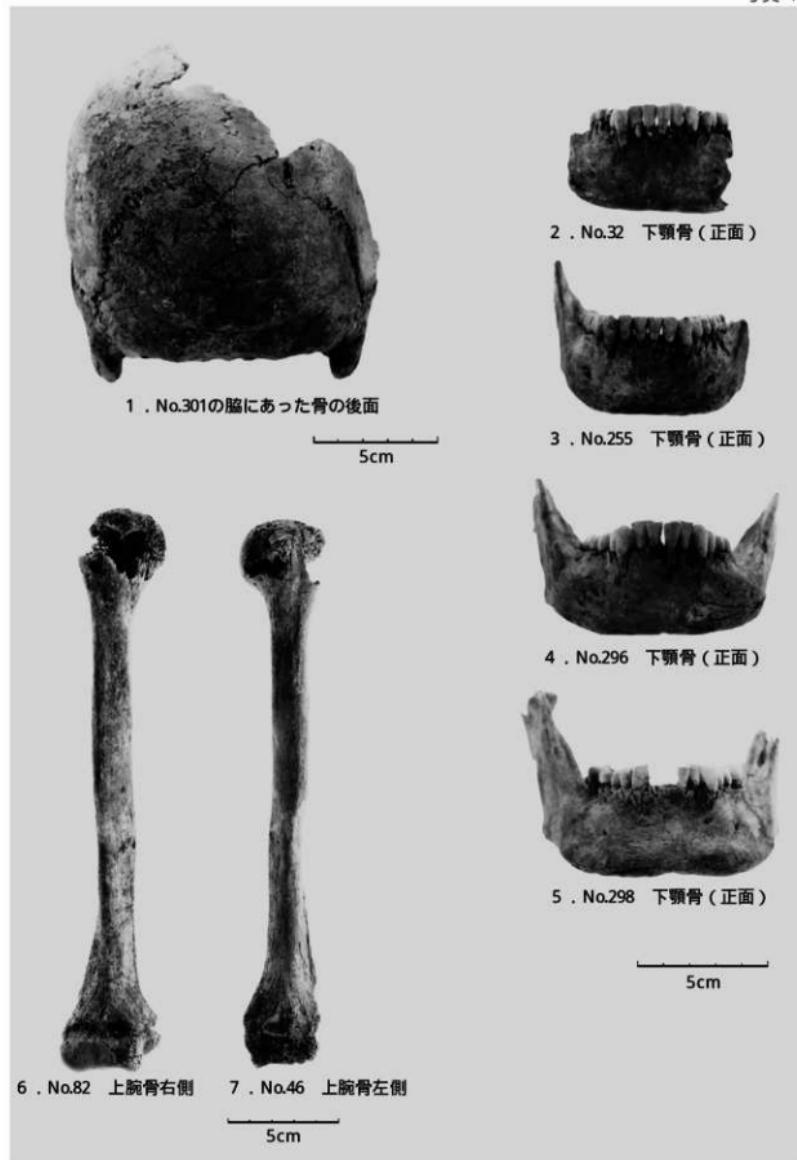
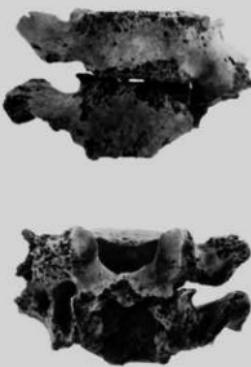


写真 5



1 . No.160 仙骨



2 . 第 5 腰椎(No.248)と第 1 仙椎(No.247)の先天性癒合(上 . 前面 , 下 . 背面)

5cm



3 . No.164 寬骨右側

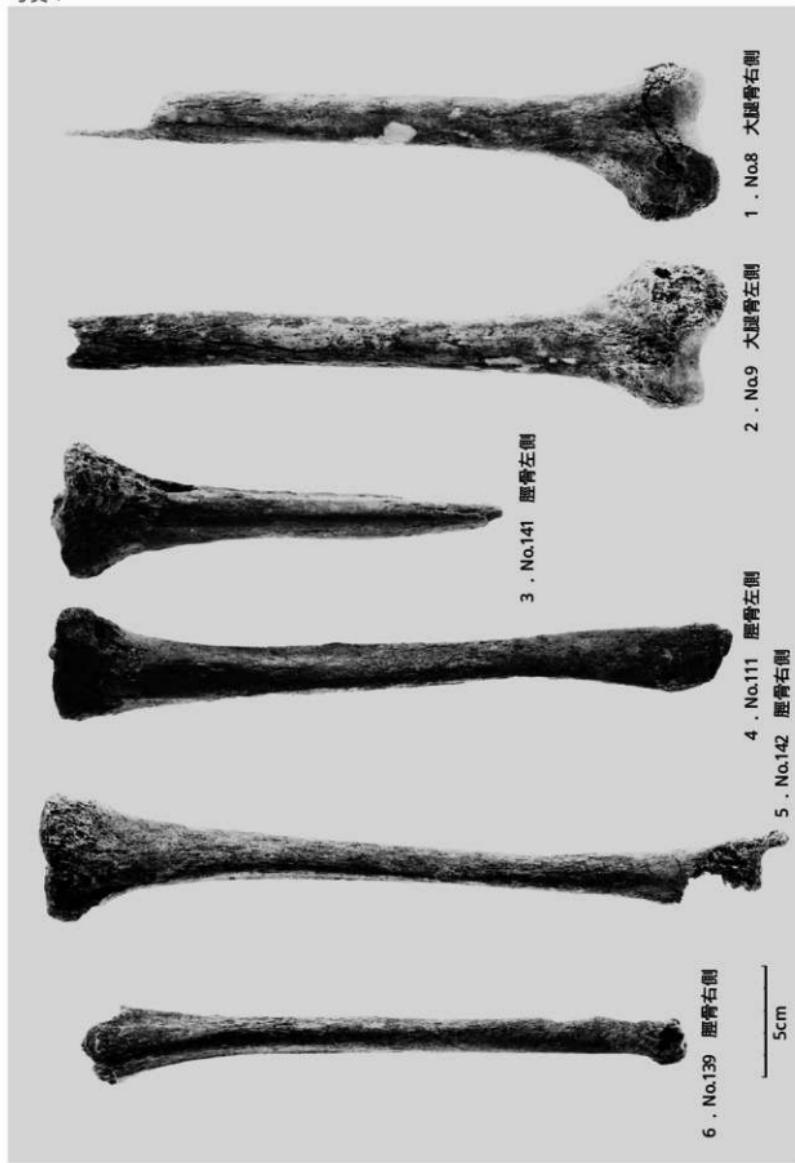


4 . No.164 寬骨左側

5cm



写真 7



2 真木野古墳出土人骨

(1) 緒言

真木野古墳は、千葉県八千代市島田台字佐山台に所在する古墳である。平成2年9月～平成3年2月にかけて調査された。人骨が検出されたのは、箱式石棺からである。石棺の長軸は東西に走向し、その大きさは長辺約2m、幅約0.8m、深さ約1m、16枚程度の板石の組み合わせ式箱式石棺である。年代は6世紀後半～7世紀代のものと推定される。石棺内は盜掘を受けており、人骨は、石棺内のほぼ全面から出土しているが、四肢骨および体幹骨は相互の解剖学的な配列を保っておらず、複数の埋葬者の頭蓋や体幹体肢骨格、埋葬者における人骨相互の解剖学的位置関係は乱れ、保存状態も悪かった。したがって、個体別に記載する事が困難であるため、人骨の部位ごとに、保存の良好な資料を選択し、それぞれ記載した。

人骨名については和名を用いた。計測はすべてマルテン法に従った。なお、本文中の計測値の単位はmmである。また、NO.付き数字は取り上げ番号である。

(2) 人骨所見

① 頭蓋

完全な形で保存されているものは無く、頭蓋破片が6点と歯が保存されている。頭蓋はそれぞれ取上げNO順に頭蓋1から頭蓋6の番号をつけた。歯は個体識別ができなかつたため別表に歯種を明記した。頭蓋1(NO.34) 左右の頭頂骨の一部、鼻骨、上顎骨の一部が保存されている。眉弓が隆起しており男性であると判断した。冠状縫合、矢状縫合はプロカの2で壯年であると判断した。

頭蓋2(NO.48) 後頭骨、左側頭骨が保存されている。頬骨突起の基部が広いことから、本個体は男性であると判断した。ラムダ骨の一部が残っており、プロカの1であることから、本個体は壯年であると判断した。

頭蓋3(NO.52) 口蓋骨、中切歯、側切歯が残っているのみである。

頭蓋4(NO.56) 後頭骨、左右の頭頂骨の後部、左側頭骨の一部が保存されている。矢状縫合の後部とラムダ縫合が残っているが、ラムダ骨やインカ骨はない。骨が非常に厚いことから、本個体を男性であると判断した。縫合はプロカの2～3に相当し、本個体の年齢は壯年後期であると判断した。

頭蓋5(NO.86) 左右の頭頂骨が残っており、本古墳出土の頭蓋骨の中では、比較的大きな破片である。骨表面は風化が進んでおり粗造であるが、頭蓋4(NO.56)と同一個体の可能性が高い。ここでは、別個体として記載した。骨が非常に厚いことから、本個体を男性と判断した。矢状縫合はプロカの2～3で、本個体の年齢は壯年後期であると判断した。

頭蓋6(NO.193) 前頭骨と鼻骨が保存されている。前頭縫合や眼窓上神経溝などの破格はみられない。眉弓が隆起していることから、本個体を男性と判断した。

② 上腕骨

肩甲骨は細かい骨片のみである。上腕骨は、完全な状態で保存されているものが無く、骨体部と小さな破片のみであった。

上腕骨1(NO.79) 右である。外側上顎の一部を除く遠位端を欠損しており、最大長の測定是不可能であった。三角筋粗面は発達しており、骨体の太さは(中央最小径18.47/中央最大径21.78)で、古墳時代の男性の平均(17.6/22.6)に近いことから、本上腕骨を男性と判断した。

上腕骨2（NO.81） 左である。骨体のみが保存されている。三角筋粗面の発達は悪いが、骨体は太く（中央最小径19.58/中央最大径27.08），頑丈であり，本上腕骨を男性と判断した。

③ 寛骨

6点が保存されているが，完全な形で保存されているものは無い。

寛骨1（NO.32） 右である。腸骨翼，恥骨体，坐骨体を欠損している。大坐骨切痕の角度は大きく，本寛骨の性別が女性であることは間違いない。

寛骨2（NO.39） 左である。腸骨の一部のみが保存されている。大坐骨切痕の角度は小さく，本寛骨の性別が男性であることは間違いない。

④ 大腿骨

大腿骨は，右が5点，左は2点残っている。

大腿骨1（NO.28） 右である。大転子から後面の小転子にかけてと，内側顆の内側，外側顆を欠損している。全体的に太く，ピラスタルはやや強く形成しているが，縄文時代の大腿骨のほどではない。骨体の上部は前後につぶれ扁平であり，骨体中央部（体中央矢状径32.0/体中央横径32.5）は，古墳時代男性平均（体中央矢状径27.1/体中央横径26.6）より太い。大腿骨最大長は435.5で，古墳時代男性平均（最大長444.0）と比べると短い。ピラスタルが発達しており，骨体中央部の緻密質が非常に厚く頑丈であることから，本大腿骨を男性と判断した。

大腿骨2（NO.31） 右である。表面は風化しており粗造で，骨体中央部のみが保存されている。ピラスタルの形成は良くない。骨体（体中央矢状径27.0/体中央横径27.2）は，古墳時代男性の平均的な形態（体中央矢状径27.1/体中央横径26.6）をしている。

大腿骨3（NO.69） 左である。大転子，大腿骨頭後面，小転子から骨体後面上部，骨体前面下部から骨端にかけて破損している。最大長は測定不可能であったが，大きく扁平で（体中央矢状径30.5/体中央横径31.2），粗線は発達している。また，骨体中央部の緻密質が非常に厚く頑丈なので，本大腿骨を男性と判断した（頭垂直径48.5/頭横径46.2）。

大腿骨4（NO.70） 左である。小転子より上部，骨端を欠損している。古墳時代の大腿骨としては粗線が強く発達し，扁平ではない（体中央矢状径32.2/体中央横径27.5）ことから，本大腿骨を男性と判断した。

大腿骨5（NO.82） 右である。骨端と大転子，骨頭を欠損している。古墳時代人に特徴的な扁平な大腿骨である（体中央矢状径24.1/体中央横径24.5）。また，骨全体が華奢であり，古墳時代人女性の平均（体中央矢状径24.2/体中央横径23.7）であることから，本大腿骨を女性と判断した。

大腿骨6（NO.117） 右である。骨体中央部が残っているのみである。骨表面は風化のために粗造で，粗線はあまり発達していない。保存状態が悪いため，計測は不可能であった。ただし，骨全体は大きく，骨質もしっかりしていることから，本大腿骨を男性と推定した。

大腿骨7（NO.217） 右である。小転子から上部を欠損している。大腿骨4（NO.70）と同様に，扁平ではなく，粗線が強く発達している（体中央矢状径32.0/体中央横径27.0）ことから，本大腿骨を男性と判断した。おそらく，大腿骨4（NO.70）と同一個体であろう。

⑤ 腰骨

脛骨は保存状態が悪く、右が1点、左が3点と破片が数点のみである。

脛骨1（NO.33） 左である。内側頸の一部と遠位端を欠損している。最大長は測定不能であったが、骨体の太さは（中央横径20.88/中央矢状径30.07），古墳時代人男性の平均（中央横径20.8/中央矢状径29.2）と同様の数値を示しており、本脛骨を男性と判断した。

脛骨2（NO.30） 右である。外側頸を欠損している。骨端の保存状態は悪く、海綿質が露出している。ヒラメ筋線が残をなしている。遠位端に蹲距面が確認できる。最大長は34.8で、骨体は太く（中央横径24.71/中央矢状径33.54），古墳時代男性の平均と比べ、頑丈であることから、本脛骨を男性と判断した。

脛骨3（NO.94） 左である。骨体のみが保存されており、最大長の計測は不可能であった。骨体の幅が広い（中央横径22.16/中央矢状径26.68）脛骨である。

脛骨4（NO.129） 左である。骨体のみが保存されている。最大長の計測は不可能であった。骨体の幅が非常に狭い（中央横径19.90/中央矢状径31.64）。

⑥ 手・足指骨

それぞれ断片的に保存されているが、骨折や病変など認められず特に記載することはない。

（3）まとめ

石棺から出土した人骨は、大腿骨の保存状況から成人4体、子供の模骨片が1点で、総数は少なくとも5体であったと鑑定した。成人4体のうち少なくとも3個体は男性であり、残りの1個体は女性である。ただし、破片資料が多く、不明な資料もあることから、更に個体数が増える可能性がある。

真木野古墳出土人骨の形態的特徴は、四肢骨においては、骨体の断面では摘まんだようなピラスターの形成は基本的にはなく、中央断面示数が縹文・現代人よりはるかに小さい。これらの特徴は、東日本古墳人の特徴と同じ傾向である。

最後に、古墳から出土する複数の被葬者間の親族関係については、九州あるいは近畿地方を中心に歯冠計測値から推定する方法が行われ成果をあげている。しかし、本古墳出土人骨の歯は遊離歯ばかりで、被葬者の埋葬過程が不明であるため、歯冠計測値から親族関係を安易に推測することは不可能であった。

謝辞

本報告を書くにあたり、人骨のクリーニングでは東京大学大学院生の白波瀬亜由美さんにお世話をになりました。末筆ながら感謝いたします。

Table 4 上腕骨(mm)

標本番号	中央最小径	中央最大径
79	18.47	21.78

Table 5 大腿骨(mm)

標本番号	最 大 長	中央矢状径	中央横径	頭垂直径	頭横径
28	434.5	32	32.5	50	49
31		27	27.2		
69		30.5	31.2	48.5	46.2
70		32.2	27.5		
82		24.1	24.5		
217		32	27		

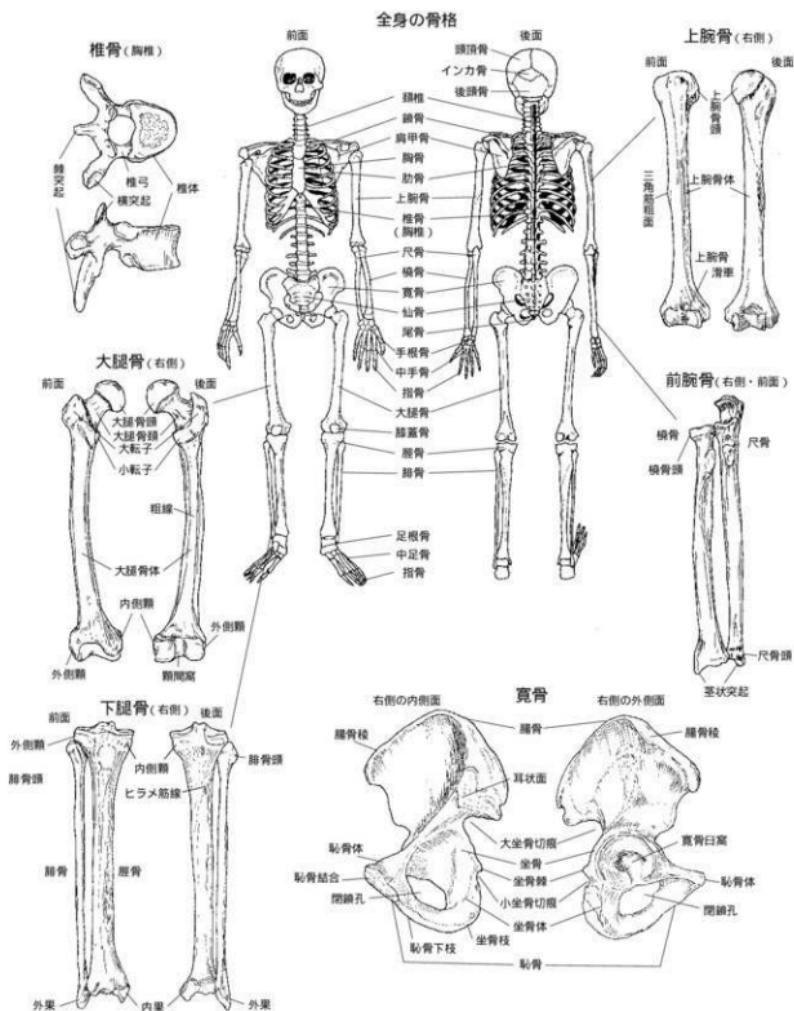
Table 6 腰骨(mm)

標本番号	最 大 長	中央矢状径	中央横径
33		30.07	20.88
30	348	33.54	24.71
94		26.68	22.16
129		31.64	19.9

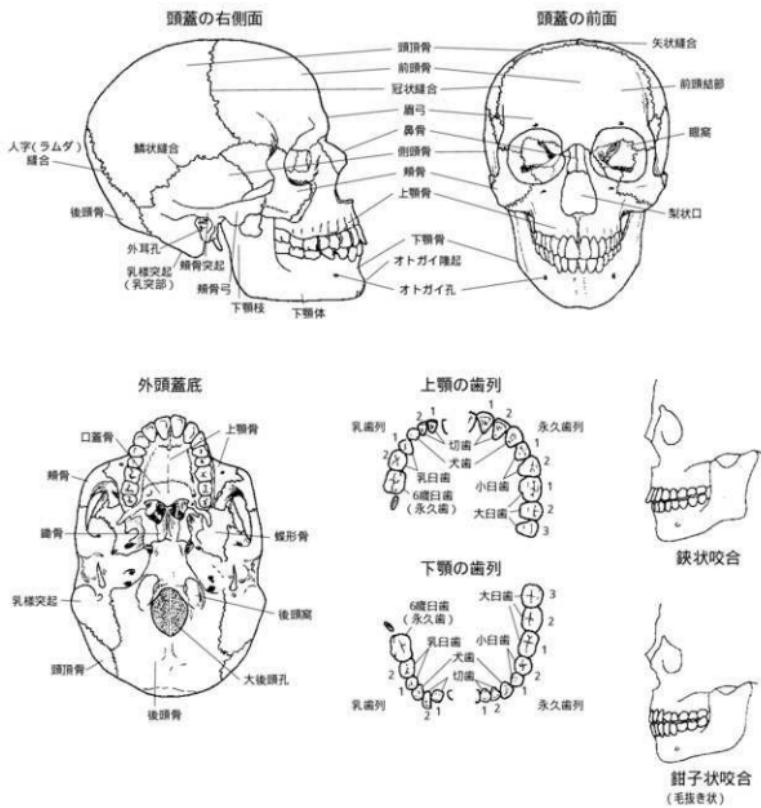
Table 7 腓骨(mm)

標本番号	中央矢状径
83	17.3

III 人骨各部位の名称



第6図 全身の骨格と四肢骨、寛骨等



第7図 頭蓋と歯

第6図・第7図は、以下の文献を参考にして作成した。

引用・参考文献

- 影岡 優子 (1998)「埋葬人骨調査方法とその留意点」(構考古学会『多知波奈考古』4号)
- 河野 邦雄・伊藤 隆造・堺 章、(社団法人東洋療法学校協会 編)(1991)『解剖学』(医歯薬出版株式会社)
- 齋藤基一郎・王昌立 共訳 (1990)『目でみる人体解剖』(廣川書店)
- 鈴木 尚 (1963)『日本人の骨』(岩波書店)
- 三井 但夫 (1974)『入門解剖図譜』(建帛社)

千葉県八千代市
市内出土人骨分析委託報告書

平成14年3月25日発行

編集・発行 八千代市教育委員会

千葉県八千代市大和田138-2

〒276-0045 TEL 047(483)1151

印 刷 金子印刷企画
